

ゲオルク・ヴィルヘルム統治時代（1665-1705）の
ツェレにおける「フランス趣味」の実態
—歴史的文脈の考察と宮廷楽団の活動に対する分析—
The “French Taste” in Celle during the Reign of Georg Wilhelm (1665–1705):
A Study of the Historical Context and Analysis of the Activities of the Court
Orchestra

七條 めぐみ
SHICHIJO Megumi

This paper attempts to clarify the participation of exiled Huguenots (French Protestants) in German court music. In particular, we will focus on the significant influence of French culture on the Court of Celle (Lower Saxony, Northern Germany) during the reign of Georg Wilhelm (1665–1705).

Since Georg Wilhelm became ruler in 1665, the court of Celle had been steeped in French culture. This was strongly related to the fact that his wife, Eleonore Desmier D’Olbreuze (1639–1722), a Protestant noblewoman from Poitou (Western France), accepted the Huguenots into her territory when they could no longer continue their faith in France. As a result, even though Celle was not a major asylum for the Huguenots, many Protestant Frenchmen found themselves in important positions in the court. In music history, it is also known that young J. S. Bach had his “encounter” with French music when he heard the Court of Celle’s orchestra. However, little attention has been paid to the migration of people behind this event.

This paper examines how French-style court orchestras were formed and operated in the Court of Celle. Specifically, we will analyze the librettos of dramatic works and the activities of the orchestra members in their performances. In doing so, we will determine what the Huguenots’ exile brought to the Court of Celle.

1. はじめに

プロテスタントの一派である改革派教徒（ユグノー）は、16世紀半ばからフランスで急速に人口を増やしたが、王権から異端と見なされ、17世紀後半には約20万人が国外に亡命した。このような大規模な人口流出により、さまざまな物的・人的資本が国外にもたらされ、フランス経済は大きな打撃を受けた。そのため、ユグノーの離散（ディアスポラ）の影響はこれまで、近世・近代ヨーロッ

パの経済史の中で重要な関心事となってきた¹。しかし、亡命ユグノーの中には、商工業だけでなく文筆業に従事したり、楽譜出版に携わったりするものもいたが、従来のユグノー研究では、このような文化的な活動に着目されることは少なく、彼らの貢献はもっぱら経済面や商業面にあったとされている。

そこで本稿では、亡命ユグノーの文化的貢献という視点から、17～18世紀ドイツの宮廷音楽文化においてユグノーがどのように参画していたかを問うてみたい。とりわけ、ゲオルク・ヴィルヘルム統治時代（1665年～1705年）のツェレ（北ドイツ・ニーダーザクセン州）において、宮廷がフランス文化の影響を著しく受けていたことに注目し、それがユグノーの亡命とどのように結びついているのかを考察する。

ツェレの宮廷に見られるフランス文化の影響は、音楽史においてはドイツ・バロック音楽における「フランス趣味」、すなわちフランス・オペラやバレエの上演、フランス人音楽家や舞踏家の雇用、ドイツの作曲家によるフランス風楽曲の創作といった文化的潮流の一つとして位置づけることができる。従来の音楽史では、フランス趣味は特にドイツの作曲家がフランス音楽の様式をどのように取り入れたのか、あるいはイタリア音楽の様式とどのように「混合」したのかという文脈で語られてきた。例えば、G.P. テレマンの作品に対する様式研究²などが当てはまる。一方で近年では、ドイツの宮廷でフランス風の音楽がどのように実践されたのか、宮廷の音楽文化に着目した研究も充実している。ただし、本稿で扱うツェレについては、同じヴェルフェン家が治めていた宮廷であるハノーファーやヴォルフエンビュッテルに比べると、あまり多くのことが分かっていない状態である³。その理由としては、ハノーファーとヴォルフエンビュッテルにはオペラ劇場があり、宮廷楽団としての規模も大きかったことが指摘できる。また、前者はアゴスティーノ・ステッファーニ（1654-1728）やジャン＝バティスト・ファリネル（1655-1720）によって、後者はヨハン・ジギスメント・クッサー（1660-1727）によって、すなわち作曲家主導でフランス風の宮廷楽団が整備され、それがフランス風の楽曲の創作や実践につながったことが大きく影響していると思われる。これに対して、ツェレにはフランス風の宮廷楽団が存在したという記述が古くからあり（Linnemann 1935）、それが J. S. バッハのフランス音楽との「出会い」にもなったという見方もある（Moeck 1987）。ただし、実際に創作・演奏された作品の音楽資料が乏しいことから、楽団の活動実態はほとんど分かっていない。また、それがユグノーの集団移住という社会的な出来事と関連づけられることもなかった。

本稿ではまず、ツェレにおける亡命ユグノーの受け入れがどのように進められたのか、歴史的な文脈を整理する。その上で、宮廷楽団が形成された過程と、ゲオルク・ヴィルヘルム時代に上演された劇作品との関連性を明らかにするとともに、台本の分析を通じて、劇作品の上演において宮廷楽団がどのような役割を果たしたのかを考察する。

2. ツェレにおける亡命ユグノー

(1) ヴェルフェン家によるツェレの統治

ツェレは1269年にリューネブルク侯領となって以降、1370年～1705年まで同国の首都として

ヴェルフェン家によって統治されていた。ヴェルフェン家は、ブラウンシュヴァイク＝リューネブルク家とも呼ばれ、現在の北ドイツ・ニーダーザクセン州の一角を治めていた貴族である。16世紀の宗教改革時には、ヴェルフェン家およびその領内はエルンスト1世(1497-1546)によりプロテスタント化が進み、三十年戦争ではザクセン選帝侯、プファルツ選帝侯などとともにプロテスタント陣営として戦った。三十年戦争が終結した1648年、ヴェルフェン家の当主となったクリスティアン・ルートヴィヒ(1622-65)がリューネブルク侯として即位し、ツェレを治めた。この頃から、戦後の復興が進められ、宮廷野外楽団や宮廷カペッラが設置され、1653年にはバレエ《愛の勝利 Die Triumphiende Liebe》の上演が行われるなど、音楽文化の充実も図られた。

1665年にクリスティアン・ルートヴィヒが亡くなると、弟のゲオルク・ヴィルヘルム(1624-1705)がリューネブルク侯となった。ゲオルク・ヴィルヘルムはプファルツ選帝侯の娘であるゾフィー・フォン・デア・プファルツ(1630-1714)と婚約していたが、それを一方的に破棄し、親族からは生涯独身を誓わされていた。しかし、1665年にリューネブルク侯になるのと同時に、フランス人下級貴族のエレオノール・デミエ・ドルブルーズ(1639-1722)と身分違いの結婚をし、翌年には一人娘のゾフィー・ドロテア(1666-1726)をもうける。独身の誓いを破ったゲオルク・ヴィルヘルムは親族から非難を浴びるが、1682年に娘のゾフィー・ドロテアが従兄のゲオルク・ルートヴィヒ(1660-1727、ゲオルク・ヴィルヘルムの弟でハノーファー選帝侯エルンスト・アウグストの長男)と結婚したことで、この騒動は一通りの終結をみた。なお、ゾフィーの結婚相手であるゲオルク・ルートヴィヒは1698年にハノーファー選帝侯、1714年にイギリス王ジョージ1世として即位した人物である。ツェレの領地は1705年のゲオルク・ヴィルヘルムの死後、このゲオルク・ルートヴィヒに受け継がれたため、ハノーファー選帝侯領に編入された。すなわち、ゲオルク・ヴィルヘルムの統治時代とは、ツェレがリューネブルク侯領の首都であった最後の期間と言える。

(2) エレオノール・ドルブルーズとツェレにおけるユグノーの受け入れ

ゲオルク・ヴィルヘルムの結婚相手エレオノール・ドルブルーズは、1639年にフランス西部・ポワトゥーのオルブルーズ城にて、プロテスタント系下級貴族の娘として生まれた。すなわち、彼女自身が改革派を信仰するユグノーであった。幼少期には、改革派の有力貴族であるラ・トレモイユ家に仕える中で、パリの王宮文化にも触れたが、1648年に勃発したフロンドの乱を機に、オランダへと亡命する。ゲオルク・ヴィルヘルムに出会ったのは亡命中の1663年のことである。1665年の結婚と同時にゲオルク・ヴィルヘルムがリューネブルク侯となったため、エレオノールも連れだってツェレ城へ住まいを移した。ツェレの宮廷では、エレオノールは兄、姉、異母兄弟などの近親者や、ポワトゥー出身者を近くに置き⁴、同時にユグノー避難民への救済活動も積極的に行った。それは例えば、改革派教会の建設と牧師の雇用に対する寄付、避難民への宿の給付などである。

このようなユグノー難民とそれに対する救済の動きは、1685年に仏王ルイ14世が「ナントの勅令」を廃止し、改革派の信仰を禁じたことで加速していく。「第2次亡命」と呼ばれるユグノーの大量離散では、約3万人がドイツに亡命し、その3分の2がブランデンブルクに定住した(金2003, 206)⁵。ニー

ダーザクセンには1,500人のユグノーが亡命し、ツェレには300人、リューネブルクには50人が移住したと言われる (Flick 1994, 13)。リューネブルク侯領内では、1684年にゲオルク・ヴィルヘルムが発した勅令により、信仰の自由が保障され、ユグノーたちは改革派の信仰を継続することができた。さらに、ツェレに逃れた300人のユグノーのうち、90人が宮廷関連の職に就いたという (Beuleke 1960, 174)。その中でも、エレオノールの周辺では特にユグノーが重用された。19世紀にエレオノールの伝記をまとめたボケールは、彼女が来てからの宮廷の状況について、「彼女の周囲に1人か2人のドイツ人の名前を見つけることさえ出来なかった」(Beucaire 1884, 83)と証言している。つまりツェレは、ベルリンに比べればユグノーの主要な亡命先とまでは言えないが、宮廷の内部にユグノーが入り込んでいたという点において、他の居住地とは異なる特色を有していたと言える。

このようなツェレの状況は当時、宮廷の外部からも「フランス的」とであると認識されていた。ツェレにたびたび滞在したハノーファー選帝侯妃ゾフィーは、プファルツ選帝侯カール1世ルートヴィヒ (1617-1680) に宛てた手紙の中で、「ツェレの宮廷は完全にフランス式であると人々は言います。アルシー侯爵⁶もまだここにあります。もはやそこにほとんどドイツ人はいません」(Bodemann, ed. 1885, 410)と書いている。ただし、領主ゲオルク・ヴィルヘルムは1675年に「私の宮廷にフランス人が多いことをまだ心配する人がいることに驚きます」(Flick 1994, 46)と述べているように、ツェレの状況は周囲から歓迎されるばかりではなかったようだ。たとえば歴史家グレゴリオ・レティ (1630-1701) は、ドイツ各地の宮廷を訪問する中で、ツェレにおいては「軍人、狩人または音楽家の身なり」であればよく、知識人である必要はないとの悪評を耳にしたという (Leti 1687, 326)。しかし、実際には学者・劇作家のサミュエル・シャピユゾー (1625-1701) が長期間滞在するなど、宮廷はプロテスタント系知識人の拠点として機能していた側面もあったと思われる。

3. 宮廷楽団の成立と活動

(1) 宮廷楽団のメンバー

ゲオルク・ヴィルヘルム時代のツェレの宮廷には、弦楽器と木管楽器で構成される「宮廷楽団」、金管楽器と打楽器で構成される「野外楽団」、そして教会音楽を担当する「宮廷カペッラ」があった。これらのうち、野外楽団と宮廷カペッラはクリスティアン・ルートヴィヒの統治時代から存在していたが、常設の宮廷楽団は置かれず、バレエ《愛の勝利》の上演 (1653年) では他の宮廷から音楽家が連れて来られ、即席の楽団を形成していたようである。1665年にゲオルク・ヴィルヘルムが統治を開始すると、1666/67年のシーズンには7名のフランス人奏者からなる宮廷楽団を創設した⁷。この楽団は1700年の時点で18人のメンバーがいたとされ (Linnemann 1935, 62)、1705年に宮廷がハノーファーに編入されるまで存続した。

表1. ゲオルク・ヴィルヘルム時代に確認される宮廷楽団のメンバー (※1)

	氏名 (※2)	役割	在籍期間	備考
1	フィリップ・ラ・ヴィーニュ Philippe La Vigne	楽長	1666-1705	初代メンバー
2	トマ・ド・ラ・セル Thomas de La Selle	楽士、舞踏教師	1666-1705	
3	クロード・ペクール Claude Pecour	楽士、舞踏教師	1666-1705	
4	フランソワ・ラボ François Rabeau	楽士	1666-1692	
5	ジャン=ジャック・ファヴィエ Jean Jacques-Favier	楽士	1666-?	
6	ギヨーム・ジョス Guillaume Josse	楽士	1666-?	
7	ルネ・デ・ヴィーニュ René des Vignes	楽士	1666-?	
8	ドニ・ド・ラ・トゥルヌール Denis de La Tourneur	楽士→オーボエ奏者	1670-1698	1670年～81年の加入
9	ギヨーム・ケイア Guillaume Caillat	楽士	1673-?	
10	ルイ・ゴドン Louis Gaudon	楽士	1678-?	
11	ポールガー Beaugard	楽士	1680のみ	
12	ニコラウス・グリッフォン Nikolaus Griffon	楽士	1681-?	
13	サン=タムール Saint-Amour	オーボエ奏者	1681-?	1680年のパリ行による加入
14	エティエンヌ・フォルロ Étienne Forlot	オーボエ奏者	1681-?	
15	フィリップ・ド・クルブザトル Philippe de Courbesastre	オーボエ奏者	1681-?	
16	ド・ラ・ガレンヌ De La Garenne	オーボエ奏者	1681-?	
17	ピエール・マレシャル Pierre Maréchal	オーボエ奏者	1683-?	
18	ミニエ Mignier	オーボエ奏者	1683-?	その後の加入
19	ピエール・ド・ヴィヴィエ Pierre de Vivier	不詳	1690-?	
20	アンリ・ド・エ Henry de Hays	不詳	1693-?	
21	シャルル・ゴドン Charles Gaudon (生年不詳-1719)	オルガン奏者	1698-1705?	
22	ベルンハルト・グレープ Bernhard Graep	不詳	1697-?	
23	ピエトロ・アウグスティン・ボナドーイ Pietro Augustin Bonadoi	不詳	1697-?	
24	ヨハン・エルンスト・ガリアルド Johann Ernst Galliard (1687-1749)	オーボエ奏者	1698-1705?	
25	ハンス・ユルゲン・フォイクト Hans Jürgen Voigt	不詳	1698-1705?	
26	エルンスト・ハインリヒ・グリム Ernst Heinrich Grimm	不詳	1698-1705?	
27	ヨハネス・フランツィスクス・グレープ Johannes Franziscus Graep	不詳	1705のみ	

※1. 本表は、Fischer 1903; Linnemann 1935; Scharrer 2014; Wallbrecht 1974 に基づき筆者が作成した。

※2. 生没年は、特に記載のない限り不詳である。

表1は、ゲオルク・ヴィルヘルム時代に確認される宮廷楽団のメンバーと、その役割と在籍期間をあらわす。宮廷楽団には1666年～1705年の間、のべ27名の音楽家が在籍していた。初代メンバーの中では、フィリップ・ラ・ヴィーニュ、トマ・ド・ラ・セル、クロード・ペクールの3名が楽団の軸となっていた。ラ・ヴィーニュは1705年まで宮廷楽長を務めた人物である。ラ・セルはヴァイオリン奏者であると同時に、リューネブルクの騎士学校（リッターアカデミー）の舞踏教師を務めるダンサーでもあった⁸。ペクールも同様に、ヴァイオリン奏者兼舞踏教師である⁹。初代メンバーのうち、はっきりとした肩書が分かっているのはこの3名のみで、他の人物については「楽士 Musikant」とのみ伝えられている。その後、1681年までに、交代も含めるとのべ5名の音楽家が

加入した。さらに、1680年にはラ・ヴィーニュとペクールがパリへ赴き、音楽家のリクルートを行っている。これにより、1683年までに6名の「オーボエ奏者 Hoboist」が加わった。彼らは、「楽士」であったドニ・ド・ラ・トゥルヌールが「オーボエ奏者」となることで給料が180ターラーから240ターラーに上がったという記述(Linnemann 1935, 61)から、相対的に高い報酬を得ていたようである。1690年代になると、上記のようなまとまった加入はないものの、1705年までに9名が加わった。その中には、シャルル・ゴドンのようにリヨン出身のユグノーでオルガン奏者であった人物や、ヨハン・エルンスト・ガリアルドのように、ツェレで生まれ、オーボエを宮廷楽団員のピエール・マレシヤルに学び、やがてハノーファーの宮廷やロンドンで作曲家としても活躍した人物が見られる¹⁰。

楽団員の顔ぶれと加入した時期に注目すると、1683年までに加入したメンバーは軒並みフランス系の氏名だと言える。一方、1690年以降に加わったメンバーには、ボナドーイのようにイタリア系の姓や、ガリアルドのようにツェレ出身のドイツ人も見られる。これとは対照的に、野外楽団では、1666年の時点でトランペット奏者としてヘニング・デネッカー、ハンス・ゲオルク・ベーデッカー、ユルゲン・ハルトマンなど、ドイツ系と思しき人名が並び、この傾向は1705年の楽団解散まで不変である(Linnemann 1935, 55-57)。もちろん、氏名のみでその人物の出自を判断することはできないが、一つの指標とはなり得るだろう。このように、ツェレの宮廷楽団は、1666年～80年代まではフランス人音楽家を中心に構成され、1690年代以降はドイツ人やイタリア人も加えた編成に変化していったということが見て取れる。

(2) ゲオルク・ヴィルヘルム時代の劇作品の上演

宮廷楽団の活動については、オーケストラ単独での演奏記録はこれまでのところ見つかっておらず、もっぱら劇作品の上演から推測されるのみである。劇作品の上演に関しては、ツェレの「宮廷帳簿 Kammer-Rechnungen Celle」に記載があるケースが多く、また台本等の史料が残っている場合もある。表2に、ゲオルク・ヴィルヘルム時代にツェレで上演された劇作品について、上演年月日、作品名、ジャンル、およびこれらの情報の出典をまとめた。最も上演時期が早いのは、1674年2月13日の《マルスとヴィーナスの愛 Les amours de Mars et de Venus》である。これ以前の作品としては、先代クリスティアン・ルートヴィヒの治下、1653年に上演されたバレエ《愛の勝利》まで遡らなければならない。当時、ツェレ城にはまだ劇場がなく、《愛の勝利》は庭園に仮の舞台を設置して上演された。劇場が完成したのは1677年であるので、それ以前に上演された作品は城の一角や庭園を用いていたと考えられる。《マルスとヴィーナスの愛》は、劇場の完成前に上演されたと見られるバレエだが、ハノーファー選帝侯妃ゾフィーの手紙で「昨日、私たちはマルスとヴィーナスの愛という、12のアントレからなるバレエを踊りました」(Bodemann, ed. 1885, 178)という言葉及において確認されるのみで、宮廷帳簿への記載は見つかっておらず、台本等の史料も現存していない。ゾフィーは同じ手紙で「踊っていたのはヴァイオリン奏者と侍従たちだけでした」と証言していることから、この作品は貴族が参加しない小規模の上演だったことが推測される。

表2. ゲオルク・ヴィルヘルム時代に上演された劇作品

年	月/日	作品名 (※1)	ジャンル	出典
1674	2/13	《マルスとヴィーナスの愛》 Les amours de Mars et de Venus	バレエ	Bodemann 1885; Wallbrecht 1974
1682	11/23	《打ちのめされた不和》 La discorde foudroyée	バレエ	Scharrer 2014
1685	7/7	《だまされた騎士》 Le cavalier duppé	コメディ	Wallbrecht 1974
1688	1/?	《ゲルマン女の勝利》 Le triomphe de la Germaine	バレエ	Wallbrecht 1974
1689	1/?	《エウロペ》 Europe	パストラル	Scharrer 2014
1691	1/?	《ドン・ジル》 Don Gille	コメディ	Wallbrecht 1974
1691	3/?	《巨人の喜劇》 Comoedie de Gigante	コメディ	Wallbrecht 1974
1691	6/?	《アルレッキーノの変態》 Metamorfosi d'Arlechino	コメディ	Wallbrecht 1974
1692	1/?	《正当化された無実の王子》 Il Principe Inocente Justificato	コメディ	Wallbrecht 1974
1692	3/?	「石の絵からの食事」 "Die Mahlzeit von dem Bild-Stein"	コメディ	Wallbrecht 1974
1693	1/?	《コヴィエツロの過去》 La Passa di Coviello	コメディ	Wallbrecht 1974
1695	3/?	「2人の魔法使いの喧嘩」 "Die Streitigkeit zweier zaubrischer Mitbuhler"	コメディ	Wallbrecht 1974

※1. 鍵括弧で記したものは、作品のタイトルそのものではなく、宮廷帳簿に書かれている文言をヴァルブレヒトが抜き書きしたものである。

1682年～89年にかけては、バレエ2作品とコメディ1作品、パストラル1作品の上演が確認される。これらはいずれもフランス語のタイトルを付けられている。《打ちのめされた不和 La discorde foudroyée》《だまされた騎士 Le cavalier dupé》《エウロペ Europe》の3作品は台本が現存するが、《ゲルマン女の勝利 Le triomphe de la Germaine》は宮廷帳簿で確認されるのみで、台本等の史料は見つかっていない。

1690年代に入ると、劇作品の演目が大きく変化する。1695年までに上演が確認される7作品は、いずれもコメディである。タイトルが分かっている作品は、《ドン・ジル Don Gille》《巨人の喜劇 Comoedie de Gigante》《アルレッキーノの変態 Metamorfosi d'Arlechino》《正当化された無実の王子 Il Principe Inocente Justificao》《コヴィエツロの過去 La passa di Coviello》の5作品で、イタリア語のものが多くなる。中には、「アルレッキーノ」や「コヴィエツロ」のように、コメディ・ア・テラテで用いられる役柄をタイトルに冠するものもある。ヴァルブレヒトによると、ツェレの宮廷では1690年代になると、イタリア人の劇団が滞在し、コメディを始めとするイタリア語の劇作品を上演していた (Wallbrecht 1974, 166-173)。ゲオルク・ヴィルヘルムは若い頃のヴェネツィア遊学をきっかけにイタリア虜人だったと言われるが (Wallbrecht 1974, 173)、この一座の活動は彼のそうした好みを反映するものと思われる。

このように、ゲオルク・ヴィルヘルム時代に上演された劇作品は、1680年代のフランス語による

バレエやパストラル、そして1690年代のイタリア語によるコメディという2つの傾向に分けられる。この傾向を宮廷楽団員の移り変わりと照らし合わせると、1680年代までは楽団がフランスの音楽家によって構成され、90年代以降にはイタリア人とドイツ人も加わっていったことと時期的に重なる。また、フランス語の劇作品の上演が1682年～89年の間に集中していることは、1680年にパリで音楽家のリクルートを行い、「オーボエ奏者」がまとまって加入したこともタイミングを同じくする。つまり、フランス風宮廷楽団の創設と増員は、フランス語の劇作品を上演する目的で行われたと考えられる。それを望んだのは、イタリア好きの領主ゲオルク・ヴィルヘルムでないとすれば、妻エレオノールと、彼女の周辺にいるフランスから来た宮廷人だったのではないだろうか。

(3) 台本に見る宮廷楽団員の役割

以下では、1680年代に上演されたフランス語の劇作品のうち、これまでに筆者が参照することのできた《打ちのめされた不和》および《エウロペ》の台本を頼りに、劇作品の上演がどのように行われ、宮廷楽団がどのように関わったのかを考察する。

バレエ《打ちのめされた不和》(1682年)

この作品は、1682年11月23日に、リューネブルク侯の娘であるゾフィー・ドロテアとハノーファー選帝侯の息子ゲオルク・ルートヴィヒの結婚を祝して、ツェレの劇場で上演されたバレエである。台本作家と作曲家はこれまでのところ分かっていない。台本は2つ折り判で製本され、上演と同年にツェレのアンドレ・ホルヴァインによって印刷された。この資料は現在、ヴォルフエンビュッテルのアウグスト大公図書館に所蔵され、電子データでも閲覧することができる。台本は28ページからなり、全体の構成は、①タイトルページ、②緒言、③役柄一覧、④台詞とト書きからなる台本（プロローグと17のアントレ）である。

タイトルページ（図1）には作品名の後に、「ツェレの大劇場において、語り、歌、器楽が混ざり合ったバレエ」と書かれている。また、「緒言」¹¹では作品について、「公平なる殿下〔訳注：ゲオルク・ヴィルヘルムのこと〕は、私たちに様々な多くの娯楽を混合するよう命じられました…語り、歌、バレエ、器楽、機械仕掛け、舞台転換の心地よい混合。これらすべてが、壮麗なる衣装に伴われ、この作品を私たちが想像できないほど美しくしています」と述べられている。これらの文言から、本作が踊りとしてのバレエだけでなく、台詞と音楽、機械仕掛けを伴う総合芸術であったことが窺える。

続く配役一覧では、「ユピテル」や「マルス」など、ギリシャ・ローマの神々もいれば、「スカラムーシュ」「アルルカン（道化師）」など、イタリアの喜劇に由来する役柄も見受けられる。作中では、これらの様々な役柄が、プロローグでは神々、あるアントレではアモルと羊飼いの、別のアントレでは農夫といったように、場面ごとに入れ変わりながら登場する。実際、表3に示したように、一人の役者が複数の役柄を担当することも多く、限られた人数で多種多様な役を演じていたようである。

役者に注目すると、ベクール、ラ・セルのように宮廷楽団員かつ舞踏教師であった人物が見受けられる。中でもベクールに対しては、第12アントレの「スカラムーシュ」や、第16アントレの「美

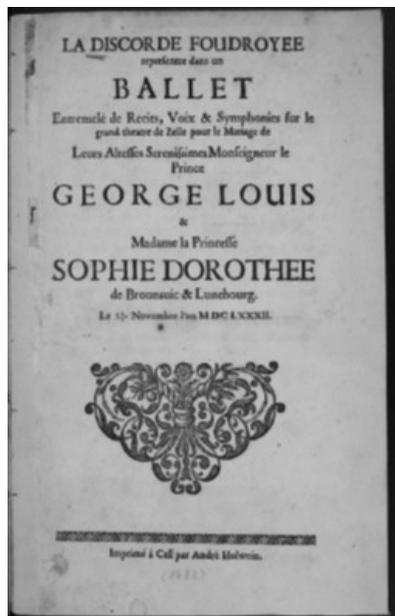


図1.《打ちのめされた不和》のタイトルページ

徳」のように、単独で踊る場面が与えられることから、彼は出演者の中でも抜きんでて踊りの達人な人物だったことが窺える¹²。一方で、役者の中にはゴドン、クルプザストルのように楽器の演奏者として宮廷楽団に在籍していた人物も確認できる。ゴドンに対しては、プロローグで「羊飼い」、第5アントレで「風刺」を演じるにあたり、単独で歌う場面が与られている。さらに、ゴドンは第6アントレでは「風刺の一団」として、ラ・セル、ド・ロシュブリューヌ、ジョスとともに踊りを踊っている。つまり、ゴドンのような、歌うことも踊ることもできる楽団員は、劇作品の役者として舞台上がることもあったと言える。

しかし、このバレエに出演していたのは、彼らのような宮廷楽団員だけではなかった。ヴァルブレヒトは、バレエは「フランス人の劇団のメンバーによって」(Wallbrecht 1974, 201) 踊られたと推測している。どのような劇団がいつ頃、ツェレ

に滞在し、何を上演したのか、具体的な活動はこれまで特定されていない。ただ、1685年7月7日に上演されたコメディ《だまされた騎士》の梗概では、第4アントレのダンサーとして「ド・フロリドール」という人物の名が挙げられている (Wallbrecht 1974, 202)。この人物は《打ちのめされた不和》で冒頭の「不和」役を演じ、その後のアントレでも数々の役柄を担当したフロリドールと同一人物か、その親戚筋だろう。なお、《だまされた騎士》の梗概には台本作家の名前は明記されていないが、ヴァルブレヒトは作品の構造や台詞回しから、フランス人劇作家オーギュスト＝ピエール・パティシエ・ド・シャトーヌフ (1640頃-1717) との関連を指摘している (Wallbrecht 1974, 202)。シャトーヌフは1680年代以降、ハノーファーの宮廷に滞在し、一座を率いてフランス語の劇を上演した人物である。つまり、ハノーファーとツェレの間で、同じ劇団がバレエの上演に携わっていたことが推測され、《打ちのめされた不和》においてもハノーファーの劇団が出演していた可能性が考えられる。

表 3.《打ちのめされた不和》の配役

役柄 (※ 1)	役者名 (※ 2)
不和 La Discorde	Floridor
ユピテル Jupiter	De La Voy
マルス Mars	De Boncour
勝利 La Victoire	Mlle. de Boncour
3人のフーリエ Les 3 Furies	Janot de La Voy
マーキュリー Mercure	Janot de La Voy
フローラ Flore	Mlle. Floridor
フローラのニンフ Nymphes de Flore	Mlle. Fanchon
ヒュメン L'Hymen	Soulas
アモルたち Les Amours	Floridot / Boncour / La Selle / Colier / La Vigne
若さ La Jeunesse	Floridor
遊戯 Les Jeux	Floridor / La Selle
快楽 Les Plaisirs	Floridor
美德 Vertune	Pecour
流れゆく河 Le Fleuve d'aller	台本中に記載なし
レーヌの河 Le Fleuve de Leine	台本中に記載なし
農夫たち Paysans	Frelot / Courbesastre / Jean / François
農婦たち Paysannes	Mlle. de la Voy
狩人たち Chasseurs	Benard / de Pletz / Pecour / George de La Voy / Philippi
狩の従者たち Valets de Chasse	Jean / François
スカラムーシュ Scaramouches	La Selle / Josse / De Rochebrune / Pecour
アルルカン Arlequins	De La Voy / Jean / François
ジブシー女 Bohémienne	Mlle. Fanchon
シルヴァンの一団 Troupe de Silvains	Gaudon / Courbesastre
羊飼いの一団 Troupe de Bergers	De Beauchamp / Gaudon / Frelot / Courbesastre / Pecour / La Selle / Philippi / La Voy
女羊飼いの一団 Troupe de Bergeres	Mlle. de Fanchon / Mlle. La Vigne
風刺の一団 Troupe de Satires	De Rochebrune / Gaudon / La Selle / Josse

※ 1. 神話上の登場人物の日本語表記については、一般的に知られる名称を採用した。

※ 2. 男性の敬称 (M.) は省略し、若い女性に付けられる敬称 (Mlle.) のみ記載した。

パストラル《エウロペ》(1689年)

この作品は1689年1月に、やはりツェレ城の劇場で上演されたパストラル(牧歌劇)である。台本作家はサミュエル・シャピュゾー、作曲家は分かっていない。台本は4つ折り判で、《打ちのめされた不和》と同じくホルヴァインによって印刷された。この資料は現在、アウグスト大公図書館に保存され、電子データでも閲覧できる。全体は51ページからなり、構成は①タイトルページ、②ゲオルク・ヴィルヘルムに宛てた詩、③ヴェルフェン家全体と、1689年にハノーファーで上演されたオペラ《ハイネリヒ獅子公 Enrico il Leone》¹³への賛辞、④プロローグの配役一覧、⑤プロローグの台本、⑥パストラルの配役一覧、⑦パストラル(全3幕)の台本である。《打ちのめされた不和》の台本よりもページ数が2倍近く多いのは、判型が小さいことも関係しているが、作品そのものが3幕構成であり、台本には台詞とト書き以外にも各幕・場の設定が詳細に記されているからである(図2)。

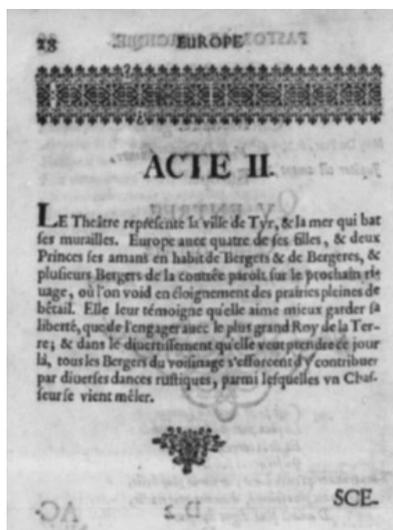


図2.《エウロペ》の台本より、第2幕の冒頭

《エウロペ》もやはり、タイトルページに「音楽、舞踏、機械仕掛け、舞台転換で飾られた英雄パストラル」と書かれているように、台詞のほかにダンス、歌、おそらく器楽もが加わった総合芸術だと言える。作品の筋書きは、オウィディウスの『変身物語』に含まれるエウロペ略奪の物語に基づき、フェニキアの王アゲノールの娘エウロペ、篡奪者であるユピテル（ゼウス）、エウロペの兄カドミュスを主軸に、略奪の悲劇とそれに対する追跡劇を描いている。さらにその中に、物語の登場人物による22のアントレ¹⁴が挿入される。

配役一覧で注目すべきは、プロローグと本編のいずれにおいても、「歌う役者」と「踊る役者」が区別されていることである（表4）。本編ではさらに、「語る役者」という区分も加わる。そのような中で、エウロペは「歌う役者」、ユピテルは「語る役者」、カドミュスは「歌う役者」と「踊る役者」に位置付けられるように、主役の3名にはそれぞれ異なる性格が与えられている。中でもベクールに割り振られたカドミュスは、物語の後半、第3幕第4場において、「8人の隊長と同数の騎兵によるトランペットと太鼓に先導されて入場し、グラン・バレエを作り上げる」（Europe, 47）という役柄である。カドミュスはこの場面で、己の勇敢さを讃える従者たちの合唱に歌で応えた後、つづく第21アントレでは単独で踊る。台本を確認する限り、《エウロペ》の本編で役者が音楽を伴って登場し、単独で踊るのはこの場面のみで、その劇的な効果は目を引くものだっただろう。このような物語のクライマックスを担ったのが、宮廷楽団の舞踏教師ベクールであることは、彼の劇作品における重要性を物語っていると見えよう。

4. おわりに

本稿ではこれまで、ゲオルク・ヴィルヘルム時代のツェレの宮廷において、フランス風の宮廷楽団がどのように形成され、活動したのか、亡命ユグノーの受け入れというツェレ特有の事情を踏まえた上で考察した。その結果、ツェレの宮廷では当時、他に類を見ないほどフランス人の影響力が強くなっていたことが、内外の宮廷人の証言により確認された。このような環境を反映するかのようになり、1666年に創設された宮廷楽団では、フランス人が楽長を務め、1680年代まではもっぱらフランス人音楽家によって楽団が構成されていた。しかし、1690年代になると、イタリア人やドイツ人と見られる音楽家も加わり、楽団のフランス色は薄まっていく。この傾向は、1680年代にはフランス語のバレエやパストラル、90年代にはイタリア語のコメディを上演するという傾向と対応するもので、宮廷楽団の顔ぶれと劇作品の演目が連動していたことが明らかになった。

本稿の後半では、バレエ《打ちのめされた不和》とパストラル《エウロペ》の台本を分析することで、劇作品の上演に宮廷楽団がどのように関わったのかを考察した。残念ながら、楽団の演奏活動について、台本資料から分かることは少ない。一方で、宮廷楽団のメンバーが劇の踊り手や歌い手とし

て登場するケースが散見された。特に舞踏教師ペクールについては、両作品における「踊りの主役」とも呼べるほどの活躍をしており、劇作品における彼の重要性が確認された。役者の大部分を担ったとされるフランスの劇団についてはいまだ詳細が明らかになっていない。今後、ハノーファーなど近隣の宮廷も含めて複数の劇作品の上演資料を参照することで、フランス語の劇作品が、劇団・宮廷楽団・その他歌手などが一体となり、どのように上演されたのか、実態をより詳細に明らかにしたい。

このようなツェレの事例は、ユグノーの亡命にともなって宮廷の構成員が変化したことにより、フランス風宮廷楽団の成立やフランス語による劇作品の実践という文化移転が生じたことを表すものと言えよう。すなわち、ツェレにおける「フランス趣味」とは、作曲家主導でフランス風の音楽が取り入れられたハノーファーやヴォルフエンビュッテルとは異なり、宗教的・社会的な事由が音楽文化に影響を与えたケースとして見なされるべきだと言える。

本研究は JSPS 科研費 JP18J00522 の助成を受けたものである。

表 4.《エウロペ》の配役

役柄 (※ 1)	役者名
プロローグ	
歌う役者	
栄光 La Gloire	Mlle. du Plat
栄光の 2 人の従者 2 Suivants de la Gloire	Gaudon / Courbesastre
快樂の合唱 Coeur de Plaisirs	
踊る役者	
マルス Mars	Pecour
マルスの従者の 3 人の英雄 3 Heros de la suite de Mars	De Plets / Philippi / La Selle
平和 La Paix	Mlle. de Chariart
富 L'Abondance	Mlle. de La Mote
力 La Force	Mlle. de Bouteille
正義 La Justice	Mlle. de Pibrac
6 人の快樂 6 Plaisirs	Bobart / Feigen / Christiani / Meyer / Mlle. Feige / Mlle. de La Selle
本編 (パストラル)	
語る役者	
ユピテル Jupiter	De La Riviere
アポロン Apollon	De La Tarre
メルキュール Mercure	Caulier
アゲノール Agenor	De La Riviere
カドミュス Cadmus	Pecour
さそり Lychas	Caulier
歌う役者	
エウロペ Europe	Mlle. du Plat

役柄 (※ 1)	役者名
アルバス Arbace	Courbesastre
ニニ阿斯 Ninias	De Vie
大祭司 Le Grand Prêtre	De Vie
大祭司の大臣 Un ministre du Grand Prêtre	Courbesastre
羊飼いの合唱 Choeur de Bergers	
"カドミュスの従者の合唱 Choeur de la suite de Cadmus"	
踊る役者	
カドミュス Cadmus	Pecour
カドミュスの 8 人の従者戦士 8 Guerriers de la suite de Cadmus	De Plets / Philippi / Feigen / De La Selle / Gaudon / De Languillete / Caulier / Meyer
エウロペの 4 人の仲間 4 Compagnes d'Europe	Mlle. de La Mote / Mlle. de Chariart / Mlle. de Bouteille / Mlle. de Pibrac
大祭司の 4 人の大臣 4 Ministres du Grand Prêtre	Bobart / Feigen / Christiani / Hoborst
4 人のアモル 4 Amours	Bucco / Puchlet / Hobort / Christiani le jeune
4 人の羊飼い 4 Bergers	De Plets / Philippi / Gaudon / De Languillete
2 人の農夫 2 Paysans	Pecour / De La Selle
狩人 Un chasseur	De Languillete
子だくさんの女 Une dame gigogne	D'Halberg
2 人の愚かな老婦と若い農夫 2 Vieilles ridicules & un petit paysan	De Tilly / De Pompierin / Armand de La Selle
2 人の牡蠣売りと 2 人のオレンジ売り 2 Porteurs d'huîtres & 2 Porteurs d'oranges	Bobart / Feigen / Gaudon / Caulier
7 人のジプシー女 7 Bohémiennes	Mlle. Feigen / Mlle. Stechinelli / Mlle. Bonn / Mlle. Roger / Mlle. Schot / Mlle. Caman / Mlle. de La Selle
7 人の牧師 7 Pâtres	D'Halberg / De Plets / Philippi / Pecour / De La Selle / Gaudon / Meyer
2 人の水兵 2 Matelos	Tilli / Eppen

※ 1. 神話の登場人物の日本語表記、役者名の敬称については表 3. の注釈を参照されたい。

註

- ¹ ユグノーの離散に関する経済史的研究としては、ウォーラーステイン 1990; 金哲雄 2003; 深澤克己 1999 などが挙げられる。
- ² テレマンの作品に見られる「混合趣味」に関しては、Zohn 2008 などを参照されたい。
- ³ ハノーファーおよびヴォルフエンビュッテルの宮廷音楽については、Wallbrecht 1974; Scharrer 2014 などの研究が挙げられる。
- ⁴ ツェレに逃れた 300 人のユグノーのうち、69 人がポワトゥー出身者だった (Beuleke 1960, 189)。
- ⁵ 北ドイツに多くのユグノーが亡命したのは、プロテスタントの領邦国家において信仰の自由が確保されやすかったという宗教的要因が前提にあると同時に、三十年戦争による人口減や工業化の遅れを補いたいという、ドイツならではの経済的要因も左右したからである。
- ⁶ 1680 年～85 年までフランス大使としてツェレにいた人物である。
- ⁷ シャーラーは楽団の成立年代を 1667/68 年のシーズンとしているが (Scharrer 2014, 186)、本稿では宮廷の一次資料を参照しているヴァルブレヒトの見解 (Wallbrecht 1974, 201) にしたがって、成立を 1666/67 年とする。
- ⁸ ラ・セルは、ジャン＝バティスト・リュリのもとで音楽を学び、18 世紀初頭のパリ・オペラ座でアンドレ・カンブラの《エジオーヌ》(1700 年初演) などに出演したダンサー、ラ・セル (前 1687-後 1704) の親戚筋にあたると見られる (Scharrer 2014, 186; Denécheau 2019, 407)。また、バッハ研究においては、ラ・セルはリユーネブルクの騎士学校とツェレの宮廷をつなぐ人物として、バッハがフランス風の音楽に触れる糸口を作ったとされる (Moeck 1987)。
- ⁹ ベカールは、17 世紀後半～18 世紀初頭にかけてパリ・オペラ座でダンサー、振付師を務めたルイ＝ギヨーム・ベカール (1653-1729) と同姓だが、両者の関係性は明らかになっていない (Lecomte 1992, 544)。
- ¹⁰ ゴドンについては Beulecke 1960、ガリアルドについては Fiske 2001 を参照されたい。
- ¹¹ この「緒言」は署名を欠くため、誰が書いたものかは明らかでないが、恐らく台本作家によるものだと考えられる。
- ¹² 《だまされた騎士》の梗概ではベカールについて「バレエを作った」と言及されることから、彼はダンサーとして踊るだけでなく振り付けも行ってたと推測される (Wallbrecht 1974, 202)。
- ¹³ ステッファニーによる 3 幕もののイタリア・オペラで、初演当時から人気を博した。
- ¹⁴ 日本ではアントレに登場する役柄が示されるのみで、具体的なト書きは乏しい。ただし中には、第 14 アントレのように「4 人のジブシー女がジグとメヌエットを踊る」(Europe, 34) と書かれ、具体的な踊りが指示されている箇所も見られる。

参考文献 (本文中に言及のあるもののみ記載)

台本 (いずれもヴォルフエンビュッテル・アウグスト大公図書館所蔵)

La Discorde foudroyée. Textb. 4^o 29.

Europe, pastorale héroïque. Textb. 180. (本文中で引用する際は Europe と表記した。)

論文・書籍

ウォーラーステイン, イマヌエル 1990 『近代世界システム 1600～1750——重商主義とヨーロッパ経済の凝集』 川北稔 (訳) 名古屋大学出版会

金哲雄 2003 『ユグノーの経済史的研究』 ミネルヴァ書房

深澤克己 1999 「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」『岩波講座 世界歴史 15——商人と市場 ネットワークの中の国家』 岩波書店 181-207

Beaucaire, Horric de. 1884. *Une mésalliance dans la maison de Brunswick (1665-1725), Eléonore Desmier D'Olbreuze, Duchesse de Zell*. Poitiers: Typographie Oudin.

Beuleke, Wilhelm. 1960. *Die Hugenotten in Niedersachsen*. Quellen und Darstellungen zur Geschichte Niedersachsens, Band 58. Hildesheim: August Lax Verlagsbuchhandlung.

Bodemann, Edouard, ed. 1885. *Briefwechsel der Herzogin Sophie Von Hannover mit ihrem Bruder, dem Kurfürsten Karl Ludwig von der Pfalz, und des Letzteren mit seiner Schwägerin, der Pfalzgräfin Anna*. Leipzig: Verlag von S. Hirzel.

Denécheau, Pascal. 2019. "La Selle." In: *Dictionnaire de l' Opéra de Paris sous l' Ancien Régime (1669-1791), Tome III, H-O*. Edited by Sylvie Bouissou, Pascal Denécheau and France Marchal-Ninosque. Paris: Classique Garnier. 407-408.

Fiske, Roger. 2001. "Galliard, John Ernest." In: *Grove Music Online*.

<https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/view/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000010555?rsk=LCAGin> (2022 年 11 月 4 日最終アクセス)

- Fischer, Georg. 1903. *Musik in Hannover, zweite vermehrte Auflage*. Hannover, Leipzig: Hahn'sche Buchhandlung.
- Flick, Andreas, Angelica Hack and Sabine Maehnert. 1994. *Hugenotten in Celle. Katalog zur Ausstellung im Celler Schloß 9. April – 8. Mai 1994*. Celle: Jensen & Hampel KG.
- Lecomte, Nathalie. 1992. "Pecour, Guillaume-Louis," In: *Dictionnaire de la musique en France aux XVIIe et XVIIIe siècles*. Edited by Marcelle Benoit. Paris: Fayard. 544.
- Leti, Gregorio. 1687. *Abrégé de l'Histoire de la maison sérénissime et électorale de Brandebourg écrite par Grégoire Leti en italien et traduit en françois... par les soins de l'auteur...* Amsterdam: Robert Roger.
- Linnemann, Georg. 1935. *Celler Musikgeschichte bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts*. Celle: Schweiger & Pick.
- Moeck, Hermann. 1987. "Le jeune Bach et la chapelle de la cour de Celle." Translated in French by Odile Volz-Wehrli. *L'orgue: Bulletin des amis de l'orgue* (201-204): 118-128.
- Scharrer, Margret. 2014. *Zur Rezeption des französischen Musiktheaters an deutschen Residenzen*. Saarbrücker Studien zur Musikwissenschaft, 16. Sinzig: Studio Verlag.
- Walbrecht, Rosenmarie Elisabeth. 1974. *Das Theater des Barockzeitalters an den welfischen Höfen Hannover und Celle*. Quellen und Darstellungen zur Geschichte Niedersachsens, Band 83. Hildesheim: August Lax Verlagsbuchhandlung.
- Zohn, Steven. 2008. *Music for a Mixed Taste: Style, Genre, and Meaning in Telemann's Instrumental Works*. Oxford University Press.

執筆者

七條 めぐみ (音楽学部作曲専攻音楽学コース 講師)